住まいと仕事をつくり、まちを将来世代につなぐ

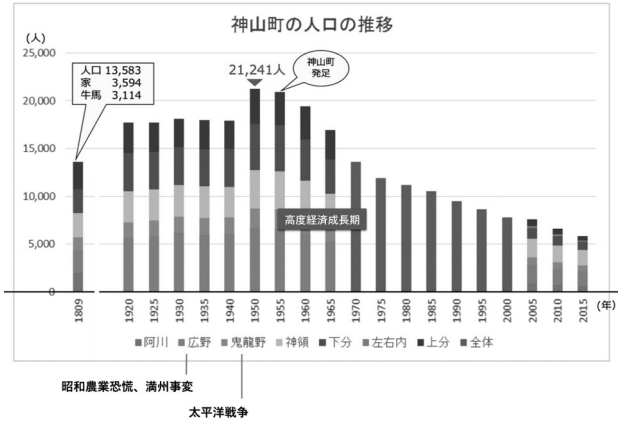
一般社団法人 神山つなぐ公社　西　村　佳　哲

神山町の約70年

神山町は四国の徳島県にある、吉野川支流の鮎喰川を骨格とした一流域の町である。町域約170㎢（山手線内側の2.7倍）に5,200名が暮らす中山間地で、最大時には２万人以上が生活していた。さらにその前の人口を調べると、文化６年は約1.4万人、記録が残っている大正９年以降の25年間はおよそ1.8万人で均衡している（図－１）。

当時の日本は、昭和農業恐慌（1930）のような国内事情を抱えつつ、耕地面積も人口も全体は増大傾向にあった。にもかかわらず均衡的なのは、当時の農業技術によるこの土地の環境容量が示されているのだろう。古い写真を見ると、山の上まで石積みの田畑がつづき、隅々まで高度な土地利用が行われている。そして写っている住まいはほぼすべて、農家の「働く家」だ。

その後、太平洋戦争の疎開者を加えて約2.1万人になった町の人口グラフは、右肩上がりで増えてゆく国内人口と逆に、高度経済成長期を通じて下がりつづける。オイルショック（1973）を経てその成長期も終わり、林業も以前のようには振るわなくなってしばらく経った1991年、当時40代を迎えつつあった神山の若い経営者や商店主が、国際交流の試みを始めた。



図－１　神山町の人口の推移

詳しくは『神山進化論』（学芸出版社）等の書籍に譲りたいが、その試みの中から、今年で21年目にもなる国際的なアーティストインレジデンス・プログラムが始まり、追って、山あいの町に移り住んでくる人々の流れが生まれ、さらに今から約10年前に「ワークインレジデンス」という動きが始まった。

ワークインレジデンス

ワークインレジデンスは、アーティストインレジデンス（AIR）を踏んだ造語である。地域住民との交流を特徴とした、別の言い方をすると予算規模が小さく、住民が力を貸すことで作品制作が実現するこの町のAIRは、それでも毎年海外から２名、国内１名の計３名枠に、30倍以上の応募が集まる人気プログラムで、国際交流の試みを始めたメンバーたちは、その選考作業を専門家に委ねず、アートには門外漢の本人たち自身で行ってきた。

彼らは「この人の作品はいいなあ」「面白い」「好ましいね」といった素直な印象で作家を選ぶ。到着するアーティストをみんなで歓待し、

写真－１　かまパン

３ヶ月間の滞在制作中は、日々様子を気に掛け、制作を支えて、完成した作品の展示を一緒に楽しんでいる。

ワークインレジデンスはその“移住版”にあたるコンセプトで、「これから町に必要な人・仕事・店を考えて、募集し、いい人に出会えたら、住み始めの過程を伴走。たとえば商いが始まったら、喜んで買い支える」というものだ（写真－１）。

「パン屋さんが来ないかな」と話していたら、ウェブで募集を始める前に町外から「パン屋さんを開きたい」という家族が訪ねてきて、以降公募機会のないまま、いろいろな職能の人や、あるいはサテライトオフィスの開設相談等がほどよく舞い込むようになり、移り住む人々の流れが出来ていった。

最初の頃は、自分たちと育ちや経験の異なる“移住者”に緊張する地元民もいたようだが、先行したアーティストたちの存在が露払いになったのか、今となっては、だいぶ暮らしや活動の混ざり合いが進んでいる。

だが、ここ数年は次第に、貸してもらえる空き物件が不足がちになっていた。

「まちを将来世代につなぐプロジェクト」

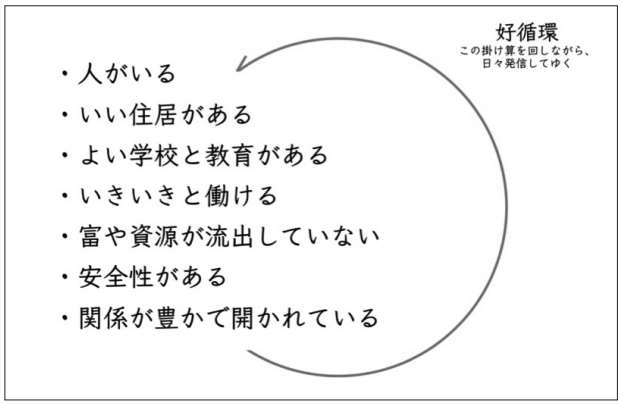
ちょうどその頃、内閣府の旗振りによる地方創生の流れがあり、神山町では「まちを将来世代につなぐプロジェクト」という施策検討が進められた。

目指すのは「まちに多様な人がいて、よい関係があり、新しい組み合わせが生まれやすく、そのときどきに必要な仕事や活動が、ほどよく生まれている」状況づくりとその下準備である。

都市の豊かな資源は「人材」であり、母数も大きい。ひるがえって田園部の資源は、なにより「自然環境」だ。が、どんなに豊かな自然があっても、それを価値化する人がいなければ始まらない。そして人、中でも若い世代がその地域にいるためには、「住まい」「教育環境」「仕事」の三つが欠かせない（図－２）。

中山間地の家や土地には、持ち主の身体の一部のようなところがあって、「空いている家はあるけれど、住める（貸してもらえる）家は少ない」実態がある。つまり町外からの転入であれ、町内の引越であれ、次の世代が自分たちの営みをつくり出してゆくために使える空間が塩漬け的で、地域を持続させる諸活動の循環は「住まい」の不足で躓いている。

そこで、公共の賃貸住宅として「大埜地の集合住宅」づくりが進められることになった。



図－２　図説（循環図）

「大埜地の集合住宅」

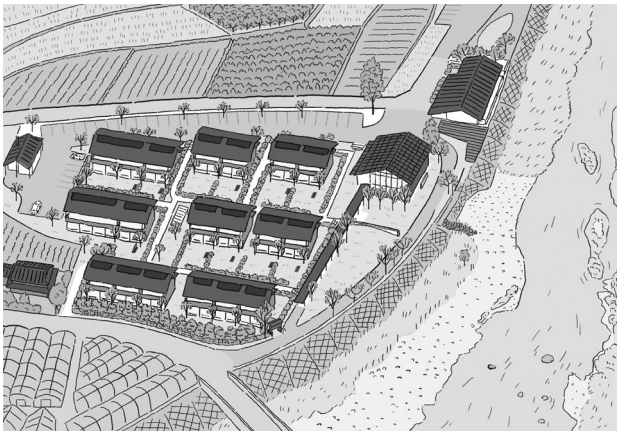
この集合住宅は、８棟・20戸の木造テラスハウスと、文化施設を含む川沿いの緑地、木質バイオマスの小規模地域熱供給設備で構成されている。開発期間は４期（４年間）にまたがり、現在２期工事が終盤に差し掛かったところ（図－３）。

神山は町域が広く人口密度が低いため、保育所や学校から家に戻ると、近所に年齢の近い子どもが少ない状況がある。子どもはおのずとゲームやDVDにも向かいやすく、育ち合いの機会を損なっていたり、あるいは親の負担が高くなる傾向があった。

それで、子育てや働き盛りの世代が、集まって暮らし、隣人としての関係性や、新しい兄弟関係を育める住まいづくりが始まる。町営の賃貸住宅だが所得で入居者が制限されないよう、公営住宅でなく、過疎債を活用した住宅開発が行われている。

主たる入居資格は「子どもの年齢」で、高校生以下の子どものいる世帯が対象。子の成長が一区切りつく頃を目処に、住まいが次の世代に明け渡されるよう、時限設定が施されている。

入居希望者が募集戸数を上回った際は、抽選でなく選考が行われる。同じ集落の住人や、近くの小学校の先生、民生委員、町に転入して年数を経た移住者など、数名で構成された委員会が本人と会い、「この人や家族と一緒に、将来の町をつくってゆきたい」と感じたかどうか。その印象を大切にして選ばれる。



図－３　イラスト

こうした姿勢は、10年ほど前に開設された神山町移住交流支援センターでも同じで、公平性より、相性や対面時の感覚が重視されている。同センターの担当者は、「地域にとっていわば結婚相手との出会いのようなもの。それを抽選や先着順で選ぶのは変ですよね」と語る。

本プロジェクトにおける“住まいと仕事”

設計はランドスケープデザインを田瀬理夫氏（プランタゴ）、建築を山田貴宏氏（ビオフォルム環境デザイン室）が担い、彼らを核にした数名のチームが担当。工事期間に入ってからは若い設計者３名が移り住んで、現場監理と調査や設計に、常駐で取り組んでいる。

工期は４年にわたる。つまり第１期（2018年度）の入居者は、工事中の敷地の一角で暮らし始めていて、この形が４期の入居年までつづく。

設計チームは当初、想定される居住者のライフスタイル、つまり「その人たちの仕事」の与件設定を町に求めた。

暮らし方がわからないことには具体的な検討が難しい。この山あいで、都市の子育て世代と同じような消費生活が営まれるわけではないだろうし、それでは町の将来にもつながらないんじゃないか。やはり一次産業。神山なら農業や林業など、この土地の自然資源を価値化する仕事に就く人々をこそ、町は迎え入れてゆくべきでないか。そしてそんな人々の暮らしのための住まいを設計するべきでないか？と。

確かにその通りなのだが、既に町で暮らす人々の中には、職場は近くの徳島市にあって、神山の家は帰る場所であるという人も少なくな

写真－2

いし、その傾向は若い世代にも多い。また親の実家との“近居”を求めて申し込んでくる人もいる。入居動機はさまざまで、特定の生き方や暮らし方に偏った設定は出来ない。

結果として「若い農林業者の住まい」といった絞り込みは行われなかった。が、１階玄関からリビング・ダイニングにつながる空間は、レベル差のない通り土間として設計され、土足・上足の範囲を、世帯ごと自由に扱えるようになった。これは農業に従事しないにしても、屋外の活動が多い農山村の暮らしには適していると思う（写真－２）。

またお風呂は２階に上げられて、１階は、北側も南側も外部との連続性が高い空間性を持っている。プライバシーを尊重しつつも閉鎖的にしないこと。他の家の大人の姿がよく見えて、何気ない接点も生じやすいことを期待している。それは先に触れた施策、「まちを将来世代につなぐプロジェクト」の基本的な考え方とつながっている。

いろいろな大人がいるまち

神山町の施策はタイトルのとおり「将来世代の可能性を高める」ことが主題で、そのためには多様な大人に触れる機会が重要だろう、という視点が共有されている。

個人的な体験だが、大学で学生に「卒業して社会に出たら、嫌な仕事でも我慢してやらないといけないんですよね？」と訊かれたことがある。答えに戸惑ったが、『この子にはそんなふうにまわりの大人が見えているんだな』と思った。彼らの人生観や仕事観には、その子のまわりにいる大人の様子が非常に強く反映していると思う。

こんな話も聞いた。「『科学者になりたい』と話していた小学生の子が、何年かして今度は『公務員になりたい』と言う。科学者と公務員の間になにもないって、どういうこと？」と。これは神山の小学校の校長先生が、やや大袈裟な例え話として聞かせてくれたものだ。

田舎の子どもは、都市部の子どもたち以上に、日常的に出会う大人の種類が限られている可能性が高い。親と、学校の先生と、あと誰か。車社会なので子どもの移動範囲は親に由るところが大きいし、町域が広く学校の行き帰りはスクールバスの子どももいる。つまり彼らには「寄り道」が難しい。自分の関心のおもむくままなにかに近づいたり、どこか覗いてみたり、そこで誰かと出会ってゆく経験が少ないだろう。

しかしこの町にはいま、いろいろな仕事や生き方を実践中の大人たちがいる。先に書いた国際交流の試みから30年を経て、さまざまな外国籍の人、アーティスト、IT 技術者、クラフト系の職人、企業経営者、焙煎所を始めた女性、パン職人、デザイナー。むろん都市にはさらに

写真－３

いろいろな人がいるわけだけど､少ない人口の、親密で近しい関係の中にそんな人々が遍在している（写真－３）。

「大埜地の集合住宅」もそれは同じで、ソフトウェア技術者、服飾作家、地域の農家の息子さん、飲食店の店長、編集者、などなど。隣り近所で暮らすそんな大人たち、人によっては在宅で働きながら生きている彼らの姿が間近にある。

エアコンがなくても自然換気で暮らせるように、年間の卓越風に沿って開口部が設計されたのは、省エネ型の公共住宅という目標もさることながら、できるだけ窓が閉め切られない、中の様子が感じられる住戸づくりへの期待もあった。細かい話だが玄関は引き戸＋網戸で、「少しだけ開いている」状態も生まれやすくなっている。スイング扉は「閉じている」ことを常態化しやすい。

また、この集合住宅の生垣や植栽は、近くの高校の生徒たちが手掛けている。約３年前に一緒に山に入り、種を採って苗を育て（農業高校なので温室がある）、２年後の秋から定植が始まった（写真－４）。

これは４期にわたり毎年くり返される。その後も、剪定作業は高校に依頼して、授業の一環でかかわりがつづく予定だ。彼らは自分たちが拾ってきた種から、町の景観が生まれる過程を目にし始めている。やがて後輩たちの仕事の蓄積も、併せて見ることになる。

定植や剪定作業で訪れながら、そこに住む大人たちに会う。住んでいる子どもたちも、高校生が学びながら働く姿を見る。こうした些細な一つひとつの経験が、なにになるとは言えないし、あらかじめわからないが、少なくとも接点がないよりはある方が、個々の人生の先のなにかにつながるのではないかと思う。

近くの山で採ってきた種で、高校生と集合住宅の植栽をつくり出してゆくこの活動は「どんぐりプロジェクト」と呼ばれている（ネーミングと初期指導は田瀬理夫氏）。在来種の緑地づくりも試みの一つだが、大きいのは「町は手づくりである」という気づきの共有ではないか。

石積みの棚田景観がわかりやすいのだが、農

写真－４

山村の空間は隅々まで人の手でつくられている。人の仕事の累積で世界が出来上がっていて、本来都市も同じなのだけど、農村のそれは想像力のひろがり方がより直接的だ。

集合住宅とはまた別のプロジェクトで同校の生徒たちと、崩れた石積みの修復も行っている。実際に自分の身体を動かすと、目に入っていた棚田の風景がまるで違うものに見えてくるのだと、生徒さんが聞かせてくれたことがあった。

建設工事を買物にしない

旧来の町の公共工事発注では、この規模の建設工事を請けられる工務店が町内に存在しないので、外の大きな地方工務店やゼネコンが落札する。その場合、数億円という予算がそのまま町外に流出するため、住宅は建っても、地域内経済循環の観点では大きな損失となるのだが、経済効果以上に、地域から「仕事」が流出してしまうことが痛いと思う。

「仕事」は稼ぎを得る機会であるだけでなく、それを通じて人が学び、出来ることが増えて、関係性が育まれ、社会の有機性を涵養する大切なメディアだ。それが町外に流れ出ることは、集合住宅づくりがただの「買物」になって、地域の人々の経験や成長の機会、つながりの生成に至らないことを意味する。

公共の集合住宅プロジェクトが、役場職員、地域の工務関係者、高校生、その他かかわる様々な人々にとって互いに育ち合う機会になることを期待して、ここでは４年間の段階的な工期を設定している。

ものづくりがその場で行われるような店先が、まちなかから消えて、どこかでつくり終えた商品が並ぶ空間ばかり増えてゆく中、建設工事は貴重な「ものづくりの現場」だと思う。小さな町でそう何度もあるわけでない公共建築の開発プロジェクトを、可能な限り多義的な機会にしようと心がけている。

すみはじめ住宅：家と店

もう一つ、集合住宅とは別の住まい整備も報告したい。約２年前から「民家改修プロジェクト」が始まり、古い民家を改修し「すみはじめ住宅」として運用している。

これはいわゆる、IU ターン希望者のお試し住宅の次段階を想定したネーミングで、町で暮らし始めながら、仕事や生業の準備を行い、関係を育て、本腰を入れて住む家を探し出す拠点となることを意図している。

中山間地には、アパートのような商品化済みの賃貸物件はほぼないし、公営住宅には所得制限がかかっている。「貸してもいい」という物件との出会いは偶然性に左右されるところが大きく、移住交流支援センターに申し込んで連絡を待つより、地域に飛び込んでしまう方が出会いの可能性は高まる。受け入れる側も、本気でかかわりやすくなる（写真－５）。

これまでに２軒の古い民家を改修した。民家改修も集合住宅と同じく多義的なプロジェクト

写真－５

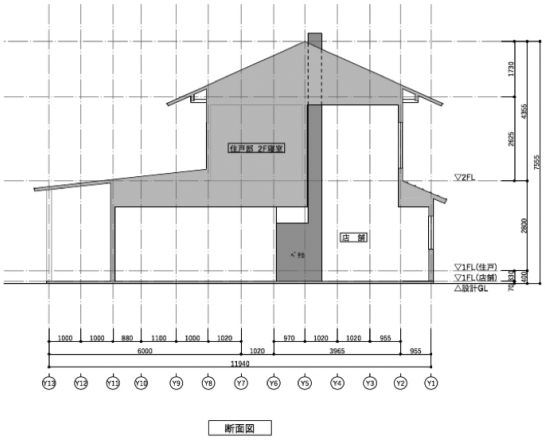
になることを指向しており、たとえば「地域の若い大工や工務関係者の協働機会をつくり、将来に向けた動きを模索してみる」ことや「古民家改修に必要な視点･知識を実践的に獲得する」など、複数の目標がある。

後者の「必要な視点･知識」には、たとえば「敷地の排水性を高め、屋内の湿度を下げて、家屋の長寿命化を図るには」とか「石場建ての伝統工法で造られた家屋に耐震性能を与えるには」などがある。とくに耐震は、公共の資金を入れる以上踏まえておきたいポイントで、岡山の片岡八重子氏（ココロエ一級建築士事務所）を通じ学ばせていただいたものが大きい。

２軒目の物件は商店街の中心にあって「寄井の家と店」と呼ばれている。小ぶりの建物だが、ここでは２階を「すみはじめ住宅」に、１階は店舗用のテナント物件として、二つの性格を持たせて整備した。入居テナントは町役場サイトで一般公募し、３件の選考を経て、現在は珈琲豆の焙煎所が営まれている（写真－６、図－４）。

商店街のシャッター街化は、神山町でも進んでいる。これは、店の奥や２階は住居なので、営業を終えても空き物件にはならず、流動化しないことによって進む。店と住まいの合一は、仕事と暮らしの統合という点ではよい形なのだ

写真－６



図－４

が、ライフステージの変化に応じた社会的な住まいの整備が進んでいないため、そこで人生のコマが止まってしまう。

この改修では、商店街の一部としてのテナント空間と、すみはじめ住宅としての居住空間を動線面でも分けて、一つの屋根の下を、異なる入居者がそれぞれのライフスパンで利活用できる形を試みた。欧米の中心街区では１階が店舗、２階以上は住居という形が一般的だが、山あいの町でそれに倣ってみたとも言える。

ある地区で人口が減少すると、商圏としての力を失い、そこで営んでいた小売店は閉業してゆく。しかしお店、とくに中山間地のそれは、商業施設であるのと同時に一種のパブリックスペースであり、商店街という広場の隅々にあるポケットパークのような性格も併せ持っている。

それらは人々の日常的な滞留装置であり、コミュニケーションの場であり、先の文脈で言えばその一部は子どもたちの居場所でもあり、大人の姿を見ながら、本人に必要ななにかを獲得してゆく社会的な空間でもある。

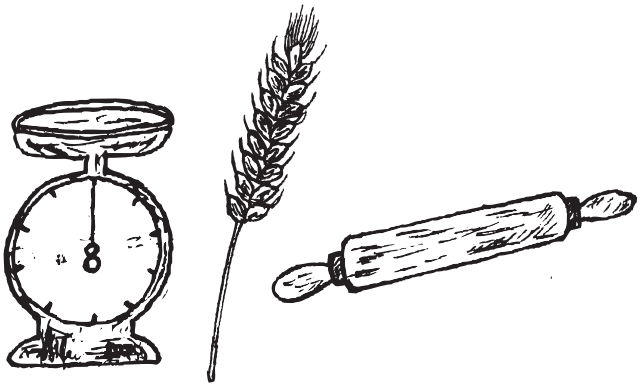
コンビニエンス・ストアやショッピングモールのお店は、分類上は同じ店舗だが、どこかでつくられた完成品を並べる販売店であることが多い。「寄井の家と店」に現在入っている焙煎

所は、その場で加工や製造が行われる工房でもあり、“つくる”場としての性格も持っている店が喜ばしい。

コーヒー豆を求めて一定のリズムで人々が訪れる場でもあるので、町のあちこちに本棚をつくって住民の読書機会を増やしている「ほんのひろば」というグループや、レジデンスプログラムで滞在中のアーティスト、お菓子づくりに情熱を傾けている地元のお母さんなど、さまざまな人の相談が持ち込まれ、ともに活用する場所性が育ち始めている。

どんな人たちが

「大埜地の集合住宅」では、この機会に町産材の認証制度がつくられ、地域の木材を地域で使う道筋が整理された。既存RC造の建物の解体ガラを産業廃棄物にせず、敷地の基盤整備工事で全て利用する試みも行われた。「民家改修プロジェクト」も、その他にも複数のプロジェクトが同時に走っている。

町役場にとっても、かかわる人々にとっても、初めて経験する仕事の連続でなかなか大変だと思う。が、先の「大人の姿を子どもが見ている」観点からすると、やり方のよくわからない、生まれて初めての仕事を、笑ったり嘆いたりしながらとことんやっている大人たちの姿は、悪くない教育資源なのではないか。

神山でも日本でも、このあと人口はみるみる減ってゆくだろう。そのとき数でなく、中身を大事にしたい。どんな人たちがそこにいるか。どんな人を育てる仕事が展開しているか。それらを可能にする器や環境が、そこにあるか。